６　次の文章は、幕末明治を生きた三河（愛知県の東部）刈谷藩医・国学者で大蔵書家、村上が、老後に作製した自分の蔵書目録の末に付した文である。これを読んで、後の問に答えよ。　　〈名古屋大〉二〇一九年度出題

　これの目録三は、人に見すべきものにもあらねど、数多くそひゆくままに、あるは失せ、あるははふらかしもぞするとて、かくはものしつるになむ。今より行く先、求めもし、写しもせむまにまに、書きも入れてむ。

　そもそもこのつどへたるどもよ、やくなきも多かれど、①なにくれとあなぐり求めむには、さしもなき書といへども、なくてはえあらぬものなれば、尾張の名古屋なるらが、見せにおこせたるまにまに、求めおきつるなり。また得がたきは、・はさらなり、の国にたよりもとめ、江戸にあとらへなどして、からくして得たるなれば、おのれなからむ後にも、ども、失なひ散らさで、わが志をつぎてよ。もしわが学びの道のかたにはえおもむかずとも、②年ごとによくほしさらして、しみのすみかとはなせそ。

　③かくいはば、いとしふふかき事とあさみわらふべけれど、この書どもは、からぶみの四書五経などを求むるがごと、たはやすくは得がたければなり。さるは、写し巻にて伝はれるはさらなり、刷り巻といへども、かの四書五経のごと、書肆てふ書肆に家ごとには持たらず、④とみにえうずる事ありて、ここら尋ね求むれども、え得ずて、へてやうやう得たるなどあり。かかれば、はつかなる書にても、たはやすく得たりとな思ひそや。かばかりは、富める人のあたりには、風にうかるる塵ならめど、いふかひなく貧しきおのれにとりては、おぼろけならむやは。

　また、写したる、書き入れたるなどは、夜中・暁といはず、君につかへ、見ありくいとまのひまにものせしなれば、ことにからくしていで来たるなり。鬼の目をつぶしかけたらむごとき手して書きたりとて、いたくな思ひおとしそ。人のひめ持たるを、あながちにこひ得て写ししなれば、これはたおほかたにはあらずかし。かにもかくにも、ゆめなはふらしそ。

くがねにもしかずと子らや思ふらむかたみにのこす

【注】

○はふらかし─―「はふらかす」は放置すること。

○尾張─―愛知県の西部。

○木の国─―紀伊国（和歌山県と三重県の南部）。江戸時代には紀伊和歌山の本屋から国学系の書物が数多く出版された。

○からぶみ─―漢籍。

○写し巻─―写本。書写された本。

○刷り巻─―版本。印刷された本。

○鬼の目をつぶしかけたらむごとき手―─悪筆の意。『うつほ物語』に見える表現。

○はふらし―─「はふらす」は「はふらかす」に同じ。

問１　傍線部①～④を、わかりやすく現代語訳せよ。

問２　文末の和歌について、そこに込められた筆者の思いを説明しつつ、わかりやすく現代語訳せよ。

◎問３　当時の人が書物を手に入れて読むのに、どのような苦労があったか、この文章から推察できることを説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝Ａあれこれと詳しく調べる際には、Ｂたいしたこともない書籍だというが、Ｃなくてはすますことができないものなので

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

　　　②＝Ａ毎年まめに書籍の虫干しをして、Ｂ紙魚のすみかとしてくれるな

Ａ＝４〔「書籍／書物の」がなければ０。「虫干し」は「本を干す」なども可。〕

Ｂ＝６〔禁止の訳が不明瞭なものは０。「虫の食った本にしてはならない」なども可。〕

　　　③＝Ａ自分の死後の蔵書の管理まで言うならば、Ｂひどく執念深いことだと家族の者はあきれて笑うだろうけれど

Ａ＝５〔「自分の死後の蔵書の管理」に触れていなければ０。「蔵書を大切にせよ」などの内容があれば可。〕

Ｂ＝５〔「書籍への執着・執念」に触れていなければ０。「家族の者は」がなければ減点２。「あきれて笑うだろう」がなければ減点２。〕

　　　④＝Ａ急に必要なことがあって、Ｂあちこち探し求めたけれど、Ｃ手に入れることができなくて

Ａ＝４〔「急に」「必要な」がなければそれぞれ減点２。〕

Ｂ＝３〔「ここら」の意味「あちこち／たくさん」がなければ０。〕

Ｃ＝３〔不可能の意味がなければ０。〕

問２　Ａ黄金にも及ばないつまらないものだと子どもらは思っているだろうか。Ｂ（私が苦労して集め）形見として残すこのたくさんの蔵書たちを。

Ａ＝５〔「しかず」の訳がなければ減点２。「や～らむ」の「～だろうか」がなければ減点３。〕

Ｂ＝５

問３　写本はもちろんのこと、印刷された版本であってもＡ書店にあるとは限らないので、Ｂ何年もかけてつてをたより、あちこち探し回らなければならず、しかも出回っているＣ書籍の数自体が少なく高価である。なかでもＤ人が秘蔵している本などは、無理に頼んで写さねばならなかった。

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝２／Ｄ＝３

【現代語訳】

　この蔵書目録の三巻は、他人に見せるべきものでもないのだが、次々と増えていくにつれて、あるものは散逸し、あるものは放置してはたいへんだと、このように目録を作成したのである。このさき、（書籍を新たに）求めもし、写しもするつど、（この目録に）加筆しようと思う。

　そもそもここに集めた書籍らは、役にも立たないのが多いが、問１①あれこれと詳しく調べる際には、たいしたこともない書籍だというが、なくてはすますことができないものなので、尾張の名古屋にある書店らが、（私のところまで）見せによこしてきたままに、求めおいたものである。また入手しにくいものは、京・大坂は言うまでもなく、紀伊の国にまでつてをたよって求め、江戸に頼むなどして、苦労して手に入れたものなので、自分が死んだあとにも、子孫らが、散逸させないで、自分の（蔵書への）思いを継承してほしい。たとえ自分が学んだ国学の方面に進むことができなくても、問１②毎年まめに（書籍の）虫干しをして、（どうか書籍を）紙魚のすみかとしてくれるな。

　問１③このように（自分の死後の蔵書の管理まで）言うならば、ひどく執念深いことだと（家族の者は）あきれて笑うだろうけれど、この蔵書は、漢籍の四書五経などを求めるように、たやすくは入手できないものだからである。そうはいっても、写本で伝承しているものは言うまでもなく、印刷された版本といっても、この四書五経のように、どの書店にも揃っているわけではなく、  
問１④急に必要なことがあって、あちこち探し求めたけれど、手に入れることができなくて、二、三年たってようやく入手したのなどがある。こういうことだから、ほんのちょっとした書籍でも、たやすく手に入れたとは思ってくれるなよ。こればかりは、裕福な人には、風に浮く塵（のようなもの）であろうが、ふがいなく貧しい自分にとっては、並大抵のことであろうか。（いや、そうではない。）

　また、写本や、書き入れなどは、夜中であろうが早朝だろうが、殿様のお側に侍る合間や、病人を往診する合間にしたことなので、とくに苦労してできたものである。悪筆で書いてあるといって、ひどく見下げたものに思ってくれるな。人が（大切に）秘蔵しているのを、無理に頼んで入手し写したのであるから、これはまったくいい加減なものではないのだよ。ともかく、決してほったらかしにしてくれるな。

　問２黄金にも及ばないつまらないものだと子どもらは思っているだろうか。（私が苦労して集め）形見として残すこのたくさんの蔵書たちを。